

学校物語の伝統からみる「ハリー・ポッター」シリーズ

川村学園女子大学
文学部 国際英語学科
菱田 信彦

〔1〕 ハリー・ポッターに描かれる「階級社会」

(1) 魔法使いと「マグル」(魔法使い以外の人々)が混住する世界

(2) 魔法使いたちのマグル世界への無知、無関心

- ① ロンはマグルの世界では写真が動かないということを知らない。
- ② 魔法世界には独自のスポーツがあり、マグル世界のスポーツは行われぬ。
- ③ 魔法世界にはマグル世界の飲食品は原則として流通していない。
- ④ ホグワーツの卒業生の就職先は魔法世界の中だけ。
- ⑤ マグルの人々は(ごく少数を除き)魔法世界の存在に気づきさえしない。

↓

社会に2種類の人々が存在し、同じ土地に住みながら、生活習慣も食べるものも楽しむスポーツもまるで違い、お互いのことをほとんど知りもしなければ関心もない。

⇒ イギリス階級社会の伝統的なイメージ

〔2〕 階級社会のスポーツ、居住区域、教育

(1) イギリスでは階級によって楽しむスポーツが明確に異なる。

- ① ポロ …… 限られた人々しか楽しめないスポーツ
- ② クリケット、ラグビー、ゴルフ …… 上～中流階級のスポーツ
- ③ サッカー …… 労働者階級のスポーツ

(2) ポロがクイディッチと似ている点

- ① 乗馬の技術と球技の技術が同時に要求される。
- ② 4人の選手のチーム内での役割が明確に決められている。

↓

クイディッチに夢中になっているロンは、サッカーのことはまるで知らない。

【引用 1】

Ron had already had a big argument with Dean Thomas, who shared their dormitory, about football. Ron couldn't see what was exciting about a game with only one ball where no one was allowed to fly. (Stone 107)

ロンは同室のディーン・トーマスとサッカーについてすでに激しい議論をしていた。ロンは、ボールをひとつしか使わず、選手が空を飛んではいけないスポーツのどこが面白いのか分からない、と言った。

⇒ 彼らの間に横たわる「階級差」を示すために、おそらく意図的に挿入されたエピソード

(3) 居住区域と階級

イギリスでは、同じ町に住んでいても、その中のどの区域に家があるか、ということが階級差をはっきりと示す場合がある。

→近代における郊外の新興住宅地の発展にともないむしろ強化される傾向あり。

【引用 2】

The classes and subclasses sorted themselves out more neatly than ever before into single-class enclaves which did not know or speak to each other. The life of the stockbroker belt with its big cars and detached houses and private infant schools was more remote from the white-collar semi-detached private estate than ever the squire was from the village almshouses or the cotton spinner from his operative's cottages. (Adonis and Pollard 182)

階級や準階級はそれまでになく綿密に区分されるようになり、その結果単一の階級のみが属する「囲い地」が形成され、異なる囲い地の間ではお互いに知り合わないし口もきかないという状況が生じた。株式仲買人が住む、大きな車のある一戸建の家が並び、私立幼稚園がある一画の生活は、かつての地主の暮らしが村の救貧院の暮らしと異なり、紡績業者の住宅が彼の職人たちの小屋と異なっていた以上に、ホワイトカラーの二戸建住宅が並ぶ一画の生活と異なっていたのである。

(4) イギリスの中等教育学校 (Secondary School)

① 95%が公立 → Comprehensive School (コンプリヘンシブ・スクール)

- ・11～16 歳の義務教育(日本でいえば小 6～高 1)
- ・原則として選抜なし
- ・進学希望者はさらに 2 年の sixth form (シックス・フォーム) で学ぶ。

② 公立校には Grammar School (グラマー・スクール) もある → 選抜制

③ 5%が私立 → Independent School (インディペンデント・スクール)

- ・13～14 歳 → third form (三級)
- ・14～15 歳 → fourth form (四級)
- ・15～16 歳 → fifth form (五級)
- ・16～18 歳 → sixth form (六級)

〔3〕 パブリック・スクール (Public School)

(1) パブリック・スクールとは何か

- ① 伝統ある私立中等教育学校
- ② 多くは寄宿制をとる
- ③ イギリスのジェントルマン階層の子弟を養成する学校として、深くイギリスの文化・社会の中に浸透している。
- ④ 「イートン・グループ」、「ラグビー・グループ」と呼ばれる主要なパブリック・スクールに在籍する生徒は、同世代の 0.5% にすぎない。
- ⑤ にもかかわらず、1984 年 9 月に組閣された内閣では、22 名の閣僚のうち 15 名がこれらの主要パブリック・スクールの出身者だった。

(2) パブリック・スクールと階級社会

内閣閣僚だけではなく、公務員、外交官、裁判官、軍隊、英国国教会、銀行などのエリート
の多くが主要パブリック・スクールの出身者



パブリック・スクールは、階級差を維持し、再生産するための「装置」としての機能をもつ。

【引用 3】

Public schools have traditionally had very close links with the universities, especially Oxford and Cambridge, and, either through them or directly, with high status professions. Parents have attempted to ensure that their positions of power and prestige within the class structure could be passed on to their sons through payment and attendance at a public school. (Walford 11)

パブリック・スクールは伝統的に、大学、特にオックスフォード大学とケンブリッジ大学との間に緊密なつながりをもつ。そしてこれらの大学を通じて、あるいは直接に、社会的地位の高い職業とのつながりをもっている。親たちは、息子たちをパブリック・スクールに入学させ、費用を支払うことによって、権力と名声をとまなう自分たちの階級構造内での地位をまちがいに彼らに受け継がせようとしてきたのである。

〔4〕 ホグワーツはパブリック・スクールか？

(1) 「パブリック・スクールではない」とするブレイクの見解

- ① 入学試験がない
- ② 授業料がかからない
- ③ 中国系やインド系など、さまざまなエスニシティの生徒が入学している。

【引用 4】

It's worth noting again that Hogwarts is *not* a public school in the classic sense: it is not selective on the grounds of parental class or wizarding ability. It serves the children of the whole wizarding community—including the potentially evil Slytherins—and anyone else who is seen to have the ability to benefit from the education it offers. (Blake 107)

ホグワーツが古典的な意味でのパブリック・スクールではないということをもう一度指摘しておきたい。ホグワーツは生徒の魔法の能力や両親の階級にもとづく選別を行わない。それは、悪しき傾向のあるスリザリン寮の生徒たちを含め、魔法世界のすべての子どもたちのために、そして他にも学校が提供する教育にふさわしい能力をもつすべての者たちのために存在するのである。

(2) 「階級差」を維持する装置としてのホグワーツ

- ① 入学試験がない
- ② 入学を決定するのは、学校側による一方的な「選抜」のみ
- ③ ハーマイオニのようなマグルの子どもたちも入学してはいるが、学校側によって選ばれないかぎり、どれほど努力しても入学できない。
- ④ ホグワーツに入学した者と入学できなかった者の間には、決定的な力の差が生ずる。

(3) 教育に関するローリング自身の体験

- ① 父親は航空機工場に勤める技師 → 娘に高等教育を受けさせたいと願う
- ② コンプリヘンシブ・スクールからオックスフォード大学への進学を志し、A レベル試験を受験
- ③ 好成績にもかかわらず、結果は不合格
→ ローリングを指導したある教員は、合格しなかったのは成績のためではなく、彼女が公立校出身だったからだと信じている。

【引用 5】

He blasted the old boy network and the old school tie: 'I say it is time to end the Old Britain where what matters are the privileges you were born into, not the potential you actually have. I say it is time these old universities open their doors to women and to people from all backgrounds.' (Smith 80)

彼は、パブリック・スクールの卒業生どうし、また出身校との結びつきによって形成される学閥を糾弾する。「人が個人の資質でなく、出自による特権によって評価される“古いイギリス”を終わらせるときがきています。伝統的な大学は女性やあらゆる階層出身の人々に門戸を開くべきです。」

(4) ローリングの分身としてのハーマイオニ

- ① マグル、すなわち「ハリー・ポッター」の世界において特権を与えられていない家庭の出身
- ② 魔法使いという特権的な人々のための学校に入り、才能と努力によって頭角をあらわす。
- ③ マルフォイなど、伝統的な魔法使いの一族出身の生徒から排斥され、自分が魔法使いの一族出身でないことを意識させられる。

(5) ホグワーツが「パブリック・スクールである」理由

- ① 「ハリー・ポッター」の世界において「階級差」として機能しているものは、現実社会における地位や職業、経済力ではない。
- ② それは、「魔法の世界に属する者」と「魔法の世界に属さない者」との間の格差である。
- ③ ホグワーツは、その両者を選別し、この格差を維持強化するために最も重要な役割を果たす機関である。

↓

現実のイギリスにおいてパブリック・スクールが果たしている役割と重なる。

〔5〕「学校物語」(School Story)の系譜

(1) 「学校物語」とは何か。

- ① 主に 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて書かれた、パブリック・スクールの生徒を主人公とする作品
- ② その多くは、自由と規律、公正なスポーツマンシップと互いの尊重など、イギリスの「紳士」が身につけるべき資質を伝えることを目的としている。

(2) 主な作品

- ① 19 世紀の代表的な作品
 - ・トーマス・ヒューズ『トム・ブラウンの学校生活』(*Tom Brown's School Days*, 1857)
 - ・F・W・ファラー『エリック、一歩また一歩』(*Eric, or Little by Little*, 1858)

② 20 世紀の人気作品

・フランク・リチャーズの「ビリー・バンター」(Billy Bunter)シリーズ

→ 1908 年から 1940 年にかけて週刊誌『マグネット』に連載

・イーニッド・ブライトンによる、『おてんばエリザベス』(*The Naughtiest Girl in the School*, 1940)など、寄宿学校を舞台とする一連の作品

【引用 6】

The plots of the canonical stories, set at British boys' public schools, soon became formulaic: They feature an ordinary good-natured boy, not particularly intellectual, but keen on sports. We would see his arrival and the larks and scrapes of his early years. We would see his awe of the older boys, as well as his willingness to do the small services expected of him as a fag (a term whose meaning was not yet explicitly sexual), such as toasting bread on a fork and making tea over a fire in an older boy's study. We would see our hero rise through the ranks to the sixth form and become a creature of awe himself, perhaps a prefect and captain of the cricket team. Occasionally we might glimpse a classroom, for a paragraph or two, but we could count on spending pages and pages on the playing fields, with at least one match described in thrilling detail. There would also be other physical adventures, probably a fight with the school bully, our hero valiantly holding his own even if he does not defeat the oaf, and perhaps also the hero's rescue of his worst enemy from drowning. There might be a moral adventure too, our hero wrongly accused of, say, stealing an examination paper and staunchly bearing the blame, suffering a caning or the threat of expulsion, but refusing to tattle on the wrongdoer—and, of course, eventually being exonerated anyway. Competition (sports, the fight with the bully) is thus balanced against peer solidarity (sports, not telling tales). The story would conclude with our hero nostalgically reflecting on the joys and triumphs of his school days as he is about to leave, and perhaps with the narrator telling us the future fates of the boy and his friends: which one is to become a Queen's Counsel, which one a lord of the Admiralty, which one Bishop of Zanzibar—thereby underscoring the connection of such stories with the British imperial project. (Clark 4)

イギリスの男子パブリック・スクールを舞台とする標準的な作品のストーリーは、やがてひとつの類型となった。主人公はごく普通の善良な少年で、とくに頭がよいわけではないが、スポーツには熱心である。われわれは彼が学校に到着し、入学早々いたずらをしたりもめごとを引き起こしたりするのを見る。彼は上級生に畏怖の念を抱き、すすんでファグ(この語はまだ露骨に性的な意味をもつてはいなかった)として、上級生の学習室でフォークに刺したパンを火にかざしてトーストにしたり、お茶の用意をしたりとささやかなサービスをする。やがて彼は進級して最上級生となり、彼自身畏怖される存在となって、たいてい監督生かクリケット・チームの主将をつとめる。授業の場面もあるが、せいぜい1～2段落で、その一方運動場の場面はたいてい何ページにもわたって続き、少なくとも1つの試合についてわくわくするような詳細な描写がある。スポーツ以外の肉体的試練もあるが、それはしばしば学校のいじめっ子との闘いで、主人公は、たとえそのガキ大将を倒せないとしても、雄々しく自分を貫く。その仇敵がおぼれかけているところを主人公が救うという場合もある。モラルに関する試練もあり、たとえば試験問題を盗んだ疑いが誤って彼にかけられるが、彼はその責めを一身に負う。むち打ちの罰を受けたり、退学させられそうになったりするが、けっして真犯人のことを告げ口しない。そしてむろん最後には彼の疑いは晴れる。かくして、競争(スポーツ、いじめっ子との対決)と、仲間との連帯(スポーツ、

告げ口をしないこと)との均衡がとられる。物語の最後では、主人公は卒業を前にして学校時代の楽しさと功業について懐旧にふけており、たいてい語り手が彼と友人たちのその後の運命について述べる。ある者は王室顧問になり、ある者は海軍大臣になり、ある者はザンジバルの司教になる――このように、この種の物語とイギリスの帝國的活動との結びつきが強調されるのである。

〔6〕学校物語としての「ハリー・ポッター」シリーズ

(1) 「ハリー・ポッター」シリーズには、上のような典型的な学校物語の要素がほぼ全てそろっている。

- ① 主人公の入学、いたずらやトラブル
- ② 主人公の進級 → 主人公や友人が監督生やチームの主将になる
- ③ 寮対抗のスポーツ競技
- ④ 学校内での不当な行為に対する抵抗
- ⑤ 主人公がいわれのない疑いをかけられる

↓

「ハリー・ポッター」は、ある意味で、20 世紀後半以降に書かれた最も典型的な学校物語のひとつだといえる。

〔7〕トムは誰と闘うのか

(1) 『トム・ブラウンの学校生活』のトムが闘う相手

- ① 自分たちに奉仕 (fagging) を強いる、五級生のフラッシュマン
 - ・トムは第1部第8章で、競馬の当たりくじを上級生に譲らなかったために、フラッシュマンに暖炉で火あぶりにされる。
 - ・同第9章では、友人のイーストとともにフラッシュマンと格闘し、五級生のディグズのサポートもあって彼を倒す。
- ② 第2部第5章で、トムは年下の友人、ジョージ・アーサーに暴力を振るおうとする五級生のウィリアムズを制止し、彼とボクシングの試合をすることになる。

【引用 7】

“I say, Scud,” said he at last, rousing himself to snuff the candle, “what right have the fifth-form boys to fag us as they do?”

“No more right than you have to fag them,” answered East, without looking up from an early number of *Pickwick*, which was just coming out, and which he was luxuriously devouring, stretched on his back on the sofa.

(中略)

“Do you know, old fellow, I’ve been thinking it over a good deal,” began Tom again.

“Oh yes, I know, fagging you are thinking of. Hang it all; but listen here, Tom—here’s fun. Mr. Winkle’s horse—”

“And I’ve made up my mind,” broke in Tom, “that I won’t fag except for the sixth.” (Hughes 134)

「ねえ、韋駄天」と、ロウソクの芯を切ろうと立ちあがりながら彼はついに言った、「五級の連中はなんの権利があつてあんなに僕らをこき使うんだらう。」

「君に彼らをこき使う権利がないのと同様、権利なんかないさ」と、イーストは『ピクウィック・ペ

『パーズ』の初期の巻から目を上げずに答えた。これは出版されたばかりで、彼はソファーに仰向けになってのんびりとそれに読みふけていたのである。

(中略)

「いいかい君、僕はこの問題についてずいぶん考えてきたのだよ」と、トムはまた始めた。

「分かってるよ。奉仕のことだろう。あんなものくそ喰らえだ。でもトム、聞けよ……ここが面白いんだ。ウィンクル氏の馬が……」

「そして僕は決心したよ」と、トムは口をはさんだ、「六級生のため以外に奉仕はしないと。」

【引用 8】

“Well, I hope so. But you’ve forgot one thing, what I want to leave behind me. I want to leave behind me,” said Tom, speaking slow, and looking much moved, “the name of a fellow who never bullied a little boy, or turned his back on a big one.” (Hughes 240)

「そうだといいが。しかし君はひとつ忘れてるよ。僕が後に残したいもののことをね。僕が後に残したいのは」と、トムは、深く心を動かされているようにゆっくり話した、「一度も下級生をいじめたことがなく、上級生に屈したこともない男の名だよ。」

- (2) トムと他の生徒との対立軸を構成するものは、つねに、年長か年少かである。これ以外に生徒どうしの対立の原因となるような要素は、作品中にほとんど示されない。

〔8〕 ハリーは誰と闘うのか

(1) fagging の不在

ホグワーツには、トムが直面する最大の問題のひとつである「下級生の奉仕」(fagging)が存在しない。シリーズ全巻を通して、ハリーが上級生と対立したり、彼が上級生と下級生のいさかいに巻き込まれたりする場面はない。

【引用 9】

Rowling also softens the darker side of public school life: there’s no victimization of younger students by older ones—nothing at all like the practice of fagging (older boys forcing younger boys to be their servants) as seen in *Tom Brown’s School Days*. Rather than an older boy as nemesis, like Flashman, Harry has to contend against one his own age, and he holds his own against Malfoy quite nicely from the start. (Steege 153)

ローリングはまた、パブリック・スクールの生活の暗い面をソフトに描いている。上級生による下級生への虐待はない。『トム・ブラウンの学校生活』に見られるようなファギング(上級生が下級生を召使のように働かせること)の習慣のようなものはまったくないのである。フラッシュマンのような上級生を宿敵とする代わりに、ハリーは同い年の敵と争わねばならない。そして彼は物語の冒頭から、まことに申し分なくマルフォイと渡り合う。

(2) ハリーが(学校内で)闘う相手

- ① マルフォイのような、魔法世界の旧家出身で、自分たちを「純血」とみなしている生徒たち
→ マグルの血をひく生徒たちを「穢れた血」(Mudblood)と呼んで差別する。

【引用 10】

‘It’s about the most insulting thing he could think of,’ gasped Ron, coming back up. ‘Mudblood’s a really foul name for someone who was Muggle-born—you know, non-magic parents. There are some wizards—like Mulfoy’s family—who think they’re better than everyone else because they’re what people call pure-blood.’ (Chamber 89)

「あれはあいつが思いつくいちばん侮辱的な言葉だったんだ」とロンは、戻ってきてあえぎながら言った。「“穢れた血”はマグル出身者——つまり両親が魔法使いでないってことだよ——のすごく汚い呼び方なんだ。魔法使いの中には、マルフォイの一家みたいに、自分たちがいわゆる“純血”だからってんで、自分たちが誰よりも優れてると思ってる連中がいるのさ。」

②ドロレス・アンブリッジ

→ 『不死鳥の騎士団』で、魔法省の意向を受けてホグワーツに乗り込み、半巨人、人狼、ケンタウロスなど、魔法世界で差別を受けている者たちを学校から排斥しようとする。

③ ヴォルデモートの勢力

→ 『死の秘宝』で、魔法省を乗っ取ったヴォルデモートは、ホグワーツからマグル出身者を排除するための政策を打ち出す。

【引用 11】

‘What’s Voldemort planning for Hogwarts?’ she asked Lupin.

‘Attendance is now compulsory for every young witch and wizard,’ he replied. ‘That was announced yesterday. It’s a change, because it was never obligatory before. Of course, nearly every witch and wizard in Britain has been educated at Hogwarts, but their parents had the right to teach them at home or send them abroad if they preferred. This way, Voldemort will have the whole wizarding population under his eye from a young age. And it’s also another way of weeding out Muggle-borns, because students must be given Blood Status—meaning that they have proven to the Ministry that they are of wizard descent—before they are allowed to attend.’ (Hallows 173)

「ヴォルデモートはホグワーツをどうしようとしてるの？」ハーマイオニはルーピンに聞いた。

「すべての魔女と魔法使いの子どもたちに入学が義務づけられた」と彼は答えた。「これは昨日告知されたんだ。大きな変化だよ。これまで一度も義務化されたことがなかったんだからね。もちろん、イギリスの魔女と魔法使いのほとんどはホグワーツで学んできたわけだが、もし両親が望めば、自宅で教育したり留学させたりすることもできた。このやり方でヴォルデモートは、魔法世界に属する者すべてを幼少期から監視下に置くことになるだろう。そしてこれはマグル出身者を根絶やしにするためのもう一つの方策でもある。なぜなら、生徒たちは入学を許可されるには「血統証明」を受けなきゃいけない……つまり彼らが魔法使いの血を引いていることを魔法省に証明する必要があるんだ。」

- (3) マルフォイとハリーの間には学年や年齢の違いはない。彼らの対立軸を形成するのは、マルフォイの血筋と、その血筋の者たちが抱いてきた価値観——つまり学校の「外」にある事情である。

〔9〕トムとハリーの闘う理由の違い

(1) 『トム・ブラウンの学校生活』で強調される、生徒の「同質性」

- ① ラグビー校の生徒の間に社会的な立場の違いはないように描かれている。
- ② 彼らの立場の違いを生み出すものは、学年と年齢の差だけ。
- ③ 学校の外に存在する社会のさまざまな格差は、生徒たちの生活にほとんど影響しない。
- ④ ブラウン家はあたかも、「階級差を気にかけない」一族であるかのように描かれる。

【引用 12】

But, luckily, Squire Brown was full as stiff-backed as his neighbours, and so went on his way; and Tom and his younger brothers, as they grew up, went on playing with the village boys, without the idea of equality or inequality (except in wrestling, running, and climbing) ever entering their heads, as it doesn't till it's put there by Jack Nastys or fine ladies' maids. (Hughes 54)

しかし幸いなことに、ブラウン郷士は隣人たちと同じぐらい頑固だったので、自分のやり方を押し通した。そこでトムや彼の弟たちは、大きくなっても村の少年たちと遊び続け、平等とか不平等とかいう考えは少しもその頭に浮かばなかった(レスリングや駆けっこや木登りにおける優劣は別だが)。こうした考えは、くだらない連中や、お上品な奥方の侍女にでも吹き込まれないかぎり、けっして子どもの頭に浮かぶものではないのである。

(2) ハリーが闘う理由は、つねに学校の「外」から来る。

- ① ホグワーツにおける生徒たちの対立軸は、「純血」(pure blood)か、「混血」(half blood)か、「マグル出身」(Muggle-born)かによって構成される。
→ 生徒たちが属する「社会階級」に起因
- ② アンブリッジは、魔法省の意向を受け、ダンブルドアを排除して校長に就任する。彼女は、意向に従うマルフォイたち一部の生徒に、他の生徒を取り締まる特権を与える。
→ ホグワーツの生徒どうしの関係は、外的要因によって変更される。

【引用 13】

'The *what?*' said Hermione sharply.

'The Inquisitorial Squad, Granger,' said Malfoy, pointing towards a tiny silver 'I' on his robes just beneath his prefect's badge. 'A select group of students who are supportive of the Ministry of Magic, hand-picked by Professor Umbridge. Anyway, members of the Inquisitorial Squad *do* have the power to dock points. . . so, Granger, I'll have five from you for being rude about our new Headmistress. Macmillan, five for contradicting me. Five because I don't like you, Potter. Weasley, your shirt's untucked, so I'll have another five for that. Oh year, I forgot, you're a Mudblood, Granger, so ten off for that.' (Order 551)

「何ですって?」と、ハーマイオニは鋭く聞いた。

「審問部隊だよ、グレンジャー」、マルフォイは言い、ローブの監督生バッジのすぐ下にある小さな銀色の「I」の文字を指さした。「魔法省を支持する選ばれた生徒たちによる部隊さ。アンブリッジ教授みずから選抜したんだ。とにかく、審問部隊の隊員は減点する権限を現にもっている。だからグレンジャー、お前は新しい校長を侮辱したかどで 5 点減点。マクミランは俺に逆らったか

ら 5 点。お前は気に食わないから 5 点だ、ポッター。ウィーズリー、シャツの裾が出てるぞ。だからもう 5 点減点だ。そうそう忘れてた。グレンジャー、お前は“穢れた血”だから 10 点減点だ。」

③ ヴォルデモートが魔法省の実権を握ることにより、hogwarts の制度は決定的に変わる。

↓

ハリーの批判や怒りは、単に目前の闘争の相手だけではなく、その闘争をもたらした「外」へ、すなわち社会の制度や因習へと向けられる。

〔10〕「ハリー・ポッター」シリーズは学校物語か？

(1) 多くの学校物語が前提としていること

- ① 学校は自律性をもった固有の組織であって、世の中の政治的状況から独立している。
- ② その規範や価値観は「伝統」であり、時代が変わっても本質的には変化しない。
- ③ 生徒たちは、学校という空間の中では対等で平等である。
- ④ 生徒たちは、学校で身につける規範や道徳によって、社会に役立つ人材となる。

(2) ローリングは、これらの前提をまさにピンポイントで突き崩す。

- ① 政治的状況が学内に決定的な影響を及ぼす。
- ② 政治の世界で誰が実権を握るかによって、学校の規範や価値観は大きく変化する。
- ③ 生徒たちの学内での立場は血筋や家柄によって決まり、彼らはけっして平等ではない。
- ④ 生徒たちが学校で身につける技能は「社会」の役に立ってはいない。それはもっぱらマグル、その他の弱い立場の者たちを支配し、魔法使いの特権を維持するために使われる。

↓

学校の「伝統」と呼ばれるものが、その時々々の権力者にとって都合のいいイデオロギーの投影にすぎないことを、この作品はまざまざと浮かび上がらせる。

(3) 「ハリー・ポッター」シリーズにとってhogwarts とは何か

- ① 『死の秘宝』ではハリーはほとんどhogwarts にいない。彼の闘いの最も重要な部分は、結局、学校の外で遂行される。
- ② 彼は学校の支援を得て闘うわけでもなく、学校のために闘うわけでもない。
- ③ 『トム・ブラウンの学校生活』の目的は、本質的にはラグビー校そのものを描くことである。それに対して、「ハリー・ポッター」シリーズはhogwarts を描くための作品ではない。

↓

hogwarts は、魔法世界で展開される複雑なパワー・ポリティクス の結節点のひとつとして、物語が進むにつれて次第に相対化されていく。

(4) このように「ハリー・ポッター」シリーズは、ある意味で、「学校物語」に対する究極のアンチテーゼである。

【参考文献】

- Adonis, Andrew, and Stephen Pollard. *A Class Act: the Myth of Britain's Classless Society*. London: Hamish Hamilton, 1997.
- Blake, Andrew. *The Irresistible Rise of Harry Potter*. London: Verso, 2002.
- Cherland, Meredith. "Harry's Girls: Harry Potter and the Discourse of Gender." *Journal of Adolescent and Adult Literacy* 52(4) Dec. 2008: 273-82.
- Clark, Beverly Lyon. *Regendering the School Story*. London: Garland, 1996.
- Farrar, Frederic W. *Eric, or Little by Little: a Tale of Roslyn School*. London: A. & C. Black. 1858.
- Hughes, Thomas. *Tom Brown's School Days*. London: Blackie & Son, 1857.
- Pugh, Tison and David L. Wallace. "Heteronormative Heroism and Queering the School Story in J. K. Rowling's *Harry Potter* Series." *Children's Literature Association Quarterly* 31. 2000: 260-81.
- Rowling, J. K. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury, 1997.
- . *Harry Potter and the Chamber of Secret*. London: Bloomsbury, 1998.
- . *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. London: Bloomsbury, 1999.
- . *Harry Potter and the Goblet of Fire*. London: Bloomsbury, 2000.
- . *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. London: Bloomsbury, 2003.
- . *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. London: Bloomsbury, 2005.
- . *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury, 2007.
- Smith, Sean. *J. K. Rowling: The Genius behind Harry Potter*. London: Arrow, 2002.
- Steege, David K. "Harry Potter, Tom Brown, and the British School Story: Lost in Transit?" *The Ivory Tower and Harry Potter: Perspectives on a Literary Phenomenon*. Ed. Lana A. Whited. Columbia: U of Missouri P, 2002. 140-56.
- Walford, Geoffrey. *Life in Public Schools*. London: Methuen, 1986.
- ウォルフオード, ジェフリー, 『パブリック・スクールの社会学: 英国エリート教育の内幕』, 竹内洋, 海部優子 訳, 世界思想社, 1996 年.
- ヒューズ, トマス, 『トム・ブラウンの学校生活 上・下』, 前川俊一訳, 岩波書店, 1952 年.
- ローリング, J・K, 『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団 上・下』, 松岡佑子訳, 静山社, 2004 年.
- , 『ハリー・ポッターと謎のプリンス 上・下』, 松岡佑子訳, 静山社, 2006 年.
- , 『ハリー・ポッターと死の秘宝 上・下』, 松岡佑子訳, 静山社, 2008 年.